

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Attempting to Maintain Objectivity in Syllabus Creation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 博之, YAMAUCHI, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000753">https://doi.org/10.15084/00000753</a>

## シラバス作成に客観性を持たせる試み

Attempting to Maintain Objectivity in Syllabus Creation

山内 博之 (YAMAUCHI Hiroyuki)

### 1. はじめに

筆者がリーダーを務める共同研究プロジェクト「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」では、メンバーの日本語教師としての勘や経験を頼りにするのではなく、客観的根拠に基づいてシラバス作成を行なうことを目標にしている。言い換えれば、「シラバス作成を科学にする」ことを目標にしているということである。そのために我々が考えている方法は、「複数の異なるアプローチによってシラバスを作成し、それらの一致度を見る」というものである。それを、まずは初級の文法シラバスにおいて行なっている。

シラバスとは学習者のニーズに依存するものであり、また、学習者は多様なので、シラバスは必然的に多様なものになる。しかし、シラバスが多様になるのは主に中上級からで、ゼロから始めるごく初期の段階においては、ある程度共通したシラバスを作成することが可能なのではないだろうか。たとえば、初級の初日の授業で、受身文を教えるのか名詞文を教えるのかということ考えた場合、複数のアプローチでシラバス作成を試みたとしても、名詞文を教える方が妥当という結論が出やすいのではないか。受身文を作るためには、動詞に受身形態素を接続させ、格助詞を変化させなければならないので、動詞文や動詞の活用を理解した後でなければ受身文は導入できない。このように、初級の段階では、知っていることが限られているので、導入できることも限られ、したがってシラバスも、ある限られたものになるのではないだろうか。

また、語彙（実質語）は、人によって使用の実態がかなり異なるものと思われるが、文法（機能語）の使用実態が人によって大きく異なるということは、あまり考えられない。使役形態素ばかりを多用する人もいないだろうし、格助詞をまったく使わないという人もいないだろう。初級という学習の初期の段階であっても、語彙シラバスは共通したものを作成することが困難かもしれない。しかし、やはり、文法シラバスであれば、初級なら、ある程度普遍的なものを作成することができるのではないだろうか。

本稿では、初級文法シラバスの作成を試みたプロジェクトメンバーの研究を3点紹介する。2.で山内（2009）、3.で庵（2011）をそれぞれ紹介し、最後に4.で中俣（2013）を紹介する。山内（2009）は、学習者の文法形態素の使用状況という観点からシラバスの作成を試みたも

のであり、庵（2011）は、地域日本語教育に役立つことを目標にして、自らが設定した方針に基づいてシラバスの作成を試みたものである。山内（2009）と庵（2011）において作成されたシラバスは、作成のアプローチがまったく異なるにもかかわらず、かなりの一致が見られた。筆者にとっては、この一致が非常に興味深く思え、さらに他のアプローチでもシラバス作成を行なってみて、それが山内（2009）及び庵（2011）のシラバスと一致するのか否かということ調べてみたくなった。このような問題意識が、この共同研究プロジェクトを始めるに至った動機でもある。

4.で紹介する中俣（2013）は、「文法項目の生産性」という独自の視点に基づいて、シラバス作成の基礎的研究を行なったものである。中俣（2013）は研究の途中段階にあり、作成されたシラバスが山内（2009）及び庵（2011）のものと同じなのか否かは、まだ定かではない。しかし、現時点での本プロジェクトの記録として、本稿にとどめておきたいと思う。

## 2. 学習者の文法形態素の使用状況から見たシラバスの作成

山内（2009）は、学習者の文法形態素の使用状況から見たシラバスの作成を試みたものである。山内（2009）では、KYコーパス<sup>1</sup>と『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク、1998）を用いてシラバスの作成を行なった。『みんなの日本語』で教えられている文法項目のうち、OPIの中級話者が使用しているものを初級の文法項目として妥当なものとし、使用していないものを初級の文法項目として妥当でないものとするという基準で、『みんなの日本語』で扱われている文法項目をそぎ落としていった。そのようにして浮かび上がった初級の文法項目は、表1のとおりである。山内（2009）では、『みんなの日本語』では扱われていないが、中級話者による使用が目立った項目もピックアップされているので、そのような項目には「\*」を付して表1に掲載した。

表1 山内（2009）による初級シラバス

品詞	項目
格助詞	が、を、に、と、から、より、で、の、について
とりたて助詞	は、も、ぐらい、だけ
並立助詞	とか、と
助動詞	です、た、ます、(ませ)ん、ない、たい、ようだ
補助動詞	ている
終助詞	か、ね
接続助詞	て、けど、たら、たり、とき、ため
接続詞	でも、じゃ(あ)、それから、*で、*だから、*たとえば
フィラー	あの一、えーと、えー

<sup>1</sup> 作成者は鎌田修・山内博之。山内博之(yamauchi-hiroyuki@jissen.ac.jp)に使用を申し込み、使用承諾書を送付すると配布される。

上記の項目の中には、動詞の普通形を作って接続するものが少なく、一方、『みんなの日本語』で扱われている助動詞、補助動詞、接続助詞の大部分、つまり普通形を作らなければ接続できない形態素の大部分を中級話者が使用していなかったことから、山内（2009）では、初級話者にとっての文法とは「丁寧形の文法、つまり普通形を作らなくても済む文法」であると結論づけている。ちなみに、山内（2009）で挙げられている、中級話者の使用が見られなかった助動詞、補助動詞、接続助詞は、表2のとおりである。なお、「※」を付した項目は、KY コーパス全体の中での使用数が少なく、中級話者のみでなく、上級・超級話者でも使用が少なかったことから、初級の項目であるか否かが不明であったとされている。

表2 中級話者による使用が見られなかった項目

品詞	項目
助動詞	のだ、受身、使役、はずだ、そうだ（様態）、そうだ（伝聞）、つもりだ、ばかりだ、ところだ
補助動詞	てくる、てしまう、てみる、※てある、※ておく、※すぎる
接続助詞	から、が、し、ながら、と、ば、ので、のに、※なら

### 3. 地域日本語教育に役立つシラバスの作成

庵（2011）は、地域日本語教育に役立つ初級文法シラバスの作成を試みたものである。庵（2011）では、「やさしい日本語」という立場から、次の表3、表4に示すSTEP1、2の項目を、地域日本語教育の初級と定義している。初級の学習者は、まずSTEP1の項目を学び、次にSTEP2へ進む。STEP1はすべて産出を前提とした項目だが、STEP2には、理解のための項目も混じっている。

庵（2011）では、以下の方針に基づき、上記のSTEP1、2を作成している。

- (1) 知的意味を不足なく表現できるようにする。
- (2) 理解レベルと産出レベルを区別する。
- (3) 一形式一機能とする。
- (4) 可能な限り項目を減らす。具体的には、動詞の自他、授受表現、受身、使役、敬語などをなくす。
- (5) STEP1には動詞の活用を含めない。

庵（2011）のシラバスの原型は庵（2009）にあり、庵（2009）では、庵（2011）とほぼ同じ形ですでにSTEP1、2が提出されている。つまり、このSTEP1、2は、山内（2009）とほぼ同じ時期に発表されたことになるのだが、山内（2009）で提出されたシラバスは、庵（2011）のSTEP1と非常によく似ている。

庵氏は「STEP1には動詞の活用を含めない」ことを作成方針として定めており、一方、山内（2009）は、初級文法を「丁寧形の文法」とであると結論づけている。この点こそが、両者のシラバスの一致を生んだ最大の理由であると思われるが、庵氏は、それを自らが考えた論

表3 STEP1 レベルの文法項目

動詞文 名詞文 形容詞文 〈応答〉	…ます／ません                      …ました／ませんでした …です／じゃないです              …でした／じゃなかったです …かったです／くなかったです 王さんは主婦ですか？ はい、そうです。 いいえ、違います。 昨日、会社に行きましたか？ はい（行きました）。 いいえ（行きませんでした）
助詞	～を                      ～の（所有格）              ～の（昨日の洗濯をしました） ～に（時間，場所，行き先） [[住んでいます] はかたまりとして導入] ～で（場所，手段，範囲） [[歩いて] はかたまりとして導入] ～から／～まで（場所・時間） ～が（目的語の「が」） ～と（同伴者，並列助詞） ～も ～は ～より ～のほうが ～か（疑問） ～ね（確認）
疑問詞	だれ，何，何〇（何時，何年，何歳，何個，何人，何杯），どこ，いつ，どれ・どっち，どの，どう，どうやって，どうしてですか？ [かたまりとして導入]
指示詞	（絵や写真を指さしながら）これは何ですか？ これ・それ・あれ／こっち・そっち・あっち／ここ・そこ・あそこ
その他	バナナを食べたいです（願望），たぶん～です／～ます（推量），いちばん～のとき，～ですから（理由）
語彙的な項目	数字，助数詞（個，人，杯），曜日，頻度副詞（いつも，ときどきなど）

理的根拠に基づいて判断しており，一方，山内（2009）では，それを学習者の文法形態素の使用状況から帰納的に導き出している。したがって，この一致は，自らの考えによって提出した庵氏の仮説が山内のデータによって実証されたと解釈することもできるだろう。

#### 4. 文法項目の生産性という視点から見たシラバスの作成

中俣（2013）は，文法項目の生産性という視点から，初級文法シラバスの作成に関する基礎データを提供しようというものである。文法項目の生産性とは，ある文法項目がどれだけの種類の実質語と結びついて使用されるかということを示す中俣氏独自の指標である。

中俣（2013）では，文法項目の生産性を表す指標として Guiraud 値を用いている。Guiraud 値とは，以下の式によって計算される値のことである。

$$R = \frac{\text{Type}}{\sqrt{\text{Token}}}$$

中俣（2013）では，「前接する動詞の種類数」を Type，「文法項目の出現頻度」を Token とみなして Guiraud 値を算出し，それを文法項目の「生産性指数」と呼んでいる。つまり，生産性指数は，以下の式によって求められるということである。

表4 STEP2 レベルの文法項目

産出レベル	
形態論	～て (テ形) ～た (タ形) 辞書形 ～ない (ナイ形)
助詞	飛行機で東京から大阪まで帰ります。(から, まで: 場所)
形式名詞	こと もの
文型	～は…ことです。 ～たり～たりします
ボイス	～ことができます ～く／～に／～ようになります
アスペクト	～ています (まだ) ～ていません ～たことがあります
モダリティ (認識)	～と思います ～なくちゃいけません (当為)
モダリティ (対人)	～てください・～ないでください (依頼) ～てもいいですか (許可求め) ～たいんですが (願望, 許可求め)
複文・接続詞	～て (「図書館に行って, 本を借ります。」) ～てから (継起) ～とき (時間) ～たら (条件) ～けど (逆説, 前置き) /～。でも, ～ので (理由) /～。だから, ～ために /～ように /～ための (目的)
その他	～んです どうして…んですか? ～からです。
理解レベル	
モダリティ (対人)	～てもいいです (許可) ～てはいけません (禁止) ～ましょう (勧誘) ～たほうがいいです (当為) ～なさい (命令)
その他	昨日買った本 (はこれです。) (名詞修飾) 田中さんが来るか (どうか) (教えてください。) (名詞化)

$$\text{生産性指数} = \frac{\text{前接する動詞の種類数}}{\sqrt{\text{文法項目の出現頻度}}}$$

94の文法項目について、BCCWJ<sup>2</sup>を用いて生産性指数を計算した結果、調査した94の文法項目に関しては、生産性指数の値が0から30の間に収まり、中央値が約15だったとのことである。

中俣(2013)では、山内(2009)の結果と比較するために、山内(2009)でとりあげた項目のみを抜き出して生産性指数を示した表を作成している。中俣(2013)では表を3つに分けて示しているが、それらを1つにまとめて示したものが次の表5である。中俣(2013)に示されているのは、BCCWJにおける出現数と生産性指数のみであるが、表5には、山内(2009)の初級シラバスにおける文法項目との異同も示した。右端の列中の「○」が付された項目は、

<sup>2</sup> 作成者は、国立国語研究所・文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクト。利用方法は、[http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/subscription.html](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/subscription.html)を参照のこと。

表5 文法項目の生産性指数

項目	BCCWJ	生産性指数	山内 (2009)
たり	62,881	27.31	○
から	61,214	22.22	
のに	11,750	21.48	
ている	817,688	20.58	○
と	219,995	20.36	
るとき	32,253	20.03	○
が	144,300	19.77	
し	28,704	19.68	
てしまう	82,574	19.62	
ながら	57,637	19.33	
ば	107,831	17.90	
られる	740,905	17.87	
か	62,582	17.66	○
てくる	89,285	17.38	
ので	3,724	16.89	
たら	64,248	16.76	○
すぎる	16,693	16.72	
たい	92,371	16.69	○
ために	1,355	14.81	○
ておく	31,358	13.19	
な	7,316	12.88	
てみる	60,508	12.80	
けど	34,782	12.54	○
よ	16,547	12.30	
ね	6,493	10.97	○
である	14,603	9.65	
のです	68,216	5.15	

山内 (2009) の初級シラバスに含まれている項目である。

筆者が中俣氏からこの研究の計画を聞いた時、最初に思ったことは「生産性が高い項目も低い項目もそれほど難易度は高くなく、難易度が高いのは生産性が中程度の項目であろう」ということだった。ほぼどんな動詞とでも接続できるような生産性の非常に高い文法項目は、

非文法的な文を作ってしまうおそれが多い。また、逆に、生産性が非常に低い項目は、よく使う動詞ごとかたまりで覚えてしまえばよい。したがって、難易度が高いのは、使用できる動詞もかなりあるが、使用できない動詞もかなりあるという、生産性が中程度の文法項目ではないかと予想した。

中俣（2013）では、前接する動詞との関係を調べているため、とりあげた文法項目が助動詞、補助動詞、接続助詞に偏っている。一方、山内（2009）では、助動詞、補助動詞、接続助詞等、動詞の活用が使用の条件となる項目は、ほとんどシラバスに入っていない。そのため、中俣（2013）と山内（2009）をシラバスの異同という観点で比較することには無理がある。しかし、表5を見ると、生産性指数が17~20あたりの文法項目には「○」がやや少ないようにも感じられる。つまり、山内（2009）のシラバスに入り得ない難度の高い項目は、中程度よりもやや高い生産性を示す「17~20」あたりに集まりやすいということなのであろうか。

Guiraud 値を用いて文法項目の生産性を測定するという手法は、まず、この手法自体の適格性・有用性が確認されるべきではあろうが、Type を「前接する名詞の種類数」あるいは「前接する名詞のカテゴリー数」などとすれば、格助詞やとりたて助詞などにも適用できる可能性がある。今後の中俣氏の研究を楽しみにしたい。

## 5. おわりに

シラバス作成を科学として成り立たせるためには、シラバス作成に反証可能性を持たせることが必要である。そのためには、まず、何らかの客観的根拠・データに基づいてシラバスを作成することが必須となる。そして、そのようにして作成された複数のシラバスを眺めることができれば、互いの相違点を、それぞれのシラバスやその作成法に対する反証として受け止めることが可能になるだろうし、逆に、一致が見られるのであれば、その一致部分は、汎用性のあるシラバスへと育っていく可能性があるものとして尊重されるべきであろう。

これまで、ベテラン教師の勘や経験に頼ることの多かったシラバスの作成を、少しでも客観的で科学的なものにしていければと思う。

### ●参考文献●

- 庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法—『やさしい日本語』という観点から—」『人文・自然研究』3: 126-141.
- 庵功雄(2011)「日本語教育文法から見た『やさしい日本語』の構想—初級シラバスの再検討—」『語学教育研究論叢』28: 255-271.
- 中俣尚己(2013)「文法項目の『生産性』の可視化の試み」国立国語研究所共同研究プロジェクト「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」第6回共同研究会(2013.3.2)発表資料.
- 山内博之(2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』東京：ひつじ書房.



《要旨》 本プロジェクトのメンバーによる、初級文法シラバスの作成に関する3つの研究を紹介した。学習者の文法形態素の使用状況からシラバスの作成を試みた山内（2009）、地域日本語教育に役立つシラバスの作成を試みた庵（2011）、文法項目の生産性という独自の視点からシラバス作成の基礎データを提供することを試みた中俣（2013）の3つである。そして、異なるアプローチで作成された複数のシラバスの異同を調べ、それぞれに反証可能性を持たせることによって、シラバス作成を科学としてとらえることが本プロジェクトの目的であることを述べた。

**Abstract:** This paper introduces three studies by project members on the creation of grammar syllabi for novice-level students. Yamauchi (2009) developed a syllabus based on the situations in which learners use grammatical morphemes. Iori (2011) attempted to create a syllabus which would be useful in regional Japanese language education. Nakamata (2013) provided basic data about syllabus creation from the viewpoint of the productivity of grammar items. The project goal was to contribute to objective syllabus construction, and the differences between the syllabi in the three studies are examined with this goal in mind.

## 山内 博之 (やまうち・ひろゆき)

実践女子大学文学部国文学科教授。修士(経済学)(筑波大学)。岡山大学文学部講師, 実践女子大学文学部助教授を経て、2007年4月より現職。

主な著書・論文: 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』(アルク, 2000), 『OPIの考え方に基づいた日本語教授法—話す能力を高めるために—』(ひつじ書房, 2005), 『誰よりもキミが好き! 日本語力を磨く二義文クイズ』(アルク, 2008), 『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』(ひつじ書房, 2009), 『実践日本語教育スタンダード』(編著, ひつじ書房, 2009)。

受賞: 第8回日本語教育学会奨励賞(日本語教育学会, 2010)。

社会活動: 日本語教育学会理事。

### 領域指定型共同研究プロジェクト

「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」  
プロジェクトリーダー 山内博之 (実践女子大学 文学部 教授)

#### プロジェクトの概要

学習者コーパスは、第二言語習得分野ではよく用いられているが、使用者が限られており、日本語文法研究や実際の日本語教育に役立つところまでの広がりとは言いえない。学習者コーパスによって見出された日本語習得の難易度は、現実の日本語教育に貢献されるべきであり、また、貢献してこそ「日本語学習者会話データベース」など学習者コーパスの意義が広く認知されると言える。本共同研究では、日本語教育文法、第二言語習得、日本語教育方法論、学習ストラテジー、学習ビリーフなど、日本語教育における幅広い分野の研究者が共同で学習者コーパスを用いて研究を行なう。目標は、日本語習得の難易度を考慮した語彙・文法を収集し、それらを基に日本語教育における初級・中級・上級シラバスを構築することである。